水上勉の《救済》の観念
―― 『五番町夕霧楼』を中心に――

孫　　暘

要　　旨

妓女，文学史上不可或缺的角色。妓女，苦难、悲哀、凄惨的代名词。但是笔者认为日本作家水上勉在《越前竹人形》、《饥饿海峡》、《雁的寺》《五番町夕霧楼》等作品中塑造的妓女形象却是宽容、慈悲与乐观。同时值得注意的是，水上文学中的妓女与男主人公多数没有性关系。水上如此描写的目的何在？妓女，对于水上而言，是否具有某种特殊的意义？本文以《五番町夕霧楼》的妓女夕子为中心，试图从这些违背常理的描写中，探讨水上文学中妓女的佛性，以及妓女在苦难中的“自救”与“他救”的伟大的生存方式。从而进一步考察水上文学的思想根源，即中国禅宗“本来无一物”思想对水上文学的潜在影响。与此同时，本文试图揭示始终关注贫困、弱势群体的水上文学的社会价值。

キーワード…… 娼妓　救済　慈悲　仏性　本来無一物

はじめに

水上勉の『五番町夕霧楼』は、『別冊文藝春秋』に昭和 37 年（1962 年）9 月から翌年の 2 月にかけて発表された。主人公の夕子は貧困家庭に生まれたがゆえに京都五番町の遊郭「夕霧楼」の娼妓となり、西陣帯織元である大旦那の竹末甚造に水揚げされながらも故郷寒村の幼馴染みの櫟田正順に想いを抱いている。その正順は酷い吃りの劣等感を持つ学僧で、鳳閣寺に放火した後に自殺、そして夕子は正順の後を追うようにして正順が眠る菩提寺の墓場で命を落とすという小説である。

本作品の注目すべき点は二つあると思われる。一つは、正順の鳳閣寺放火の動機を推察すべく娼妓を登場させて「放火動機をあぶり出す手法」[1)]を取っていること。もう一つは、娼妓である夕子の運命を書いていることである。一般的に遊郭における娼妓を描く作品は、薄幸や悲哀などをテーマにするのであろうが、水上の本作品はそうではない。水上はなぜ娼妓に注目したのだろうか。水上文学における娼妓のイメージはどのようなものか。水上は娼妓の生き方をどのようなものと考えているのか。また、夕霧楼主かつ枝と娼妓達の織り成す生活模様を家庭

的に描いているが、その意図は何なのか。以上のような問題を解明すべく、1 節においては、女性の自己救済の観念を考察する。

また、もう一つ注目すべきところは、本作品の舞台が遊郭でありながら直接的な性的描写が見られないことである。これは、どうしてなのか。水上の性に対する観念を考察したい。次に、2 節においては、女性の男性に対する《救済》の観念を考察したい。水上は「二度めの、この与謝のひとり旅の時にも、『五番町夕霧楼』という小説を書こうというような、はっきりした目的はもっていなかった」[2)]と言う。そうであるならば、どうして書く気になったのか。その水上の心中はどのようなものであったのであろうか。これらの点について考察を行う。

水上は、『「般若心経」を読む』の中で、「死して百日紅や椿になる」[3)]と書いているが、本作品の重要な場面でもその「百日紅」を描いており、両者はどのように関係しているのかを考えてみたい。仏教と関連があると思われるので、その視点から考察したい。特に中国の慧能禅との関連性が見られるので、3 節では、それを考察することで、水上の《救済》の観念の原点を探求したい。

終わりに、4 節では、『雁の寺』と『金閣炎上』において、本作品と同様の《救済》の観念が認められるかどうかなどについて考察したい。以上のような考察を通して、水上の《救済》の観念を明らかにしたい。

1　女性の自己救済

遊郭の娼妓は『雁の寺』以降、水上がしばしば登場させている重要な登場人物であるが、これについて、平野謙は、「女主人公の恨みのためである。それを著者の社会的ヒューマニズムなどといっては、いかにもそらぞらしくなる。もっと著者自身の身についた人間生存の恨みや悲しみが、そこにはじみ出ている」[4)]と述べている。平野は水上文学が社会の底辺に女性の哀しさというような共通の主題の中、水上自身の恨みを入れて、人間生存の悲哀と苦難を示したと考えている。すなわち、水上は自身が苦難、貧困の経験があるので、貧困者の代弁者として薄幸の女性の怨念と憎悪を小説に書いて、人間の恨みや悲しみをその行間に染み込ませている。『五番町夕霧楼』を表面的に見ると、水上が夕子の薄幸を明らかにして社会を批判しているかに見える。これが『五番町夕霧楼』を創造した真の目的なのだろうか。そうではなく、水上はこの小説で娼妓の自己救済と男性に対する心の救済や慈悲の心、苦痛ではなく幸福を感じる気持ち、あるいは人間の心の深層に潜んでいる善や悪などの人間性を示したと私は考える。そこで、水上文学における夕子達の運命と生き方に関する叙述について考察してみよう。

『五番町夕霧楼』には、夕子は病身の母の医療費を稼ぐために京都西陣五番町の遊郭夕霧楼に入った。一般的には、売られた夕子は両親、あるいは社会に恨みを抱くに違いなく、娼妓としての夕子は卑下や自己嫌悪という気持ちを持っているはずだと考えられる。しかし、水上は

そのような常識とは別の形で夕子を描写した。作品の中で注目すべきは、次の点である。

① 水上の考えでは、夕子あるいは娼妓は不幸であろうか。

② 人間には悪、醜、罪、欲などを持っているが、夕子達はそれらをどのように浄化しているのか。

③ 貧困、富裕、卑下、崇高、苦難、不幸などについて、水上はどのような評価基準を示しているのか。

以上について、夕子の思想、行為、言葉を通して、水上が何を暗示しているか考えてみたい。

夕子が我が身の春を売って金銭を稼いでいるのは、「お母はんの病気も早うなおしたげんならん」[5]からである。また、「近頃の娘（夕子―筆者）は、早熟さをましてきている（中略－筆者）。田舎娘らしい素朴さと、まだうぶなものが感じられ（中略－筆者）、成熟した女の匂いをたぶんに発散している。（中略－筆者）考えようによっては、父親と相談して、遊郭へ身をしずめる決心ができる娘であった」[6]から、夕子は遊郭に入ることには微塵も暗い印象はなく、割り切った気持ちで働くことができる。そして、夕子が水揚げをして金銭を得たときは、「お母はん（かつ枝－筆者）のおかげでこんな仰山のお金いただけました。おーきに、ありがとうございました。あたしは、すぐ、与謝のお母はんに、これを送ったげよ思いますねン」[7]と言って、恨み言のひとつもない。ここに夕子自身の苦悩や悲哀などは見られず、家族のために頑張っている姿が見える。夕子が家族のために娼妓として遊郭に入って働き、家族を貧困から救い出すことができれば、それが夕子の幸せにも繋がる。ここに、自らの不幸を救う《自己救済》の心持ちが見られ、それが幸福感を感じることに繋がるのである。

次に、一般論として娼妓達は互いにライバルとして陰に陽にしのぎを削ると思われる。しかし、本作品では、その常識に反して皆姉妹のごとく描かれている。すなわち、新入りの夕子に対して同僚の娼妓達は皆好感をもって迎え入れ、夕子が客を取って稼いだときは、同僚達から温かい微笑を貰った。このような情況は『警世通言』の第三十二巻である『杜十娘怒沈百宝箱』および老舎の『三日月』などにおける遊郭の娼妓達の悲惨な運命の描き方とは違う。また、夕子が死亡したときは「かつ枝は涙を両頬にいくすじもつたわらせ、ぬぐおうともしない。娼妓たちは、こっくりうなずいて、かつ枝の説得に同調をしめした」[8]。水上はこのように、夕霧楼を温かい家族的なものとして描いているが、なぜなのか。それは、水上が寺を脱走してから京都五番町の遊郭に通い詰めていたことや、また満州に渡ったとき、そこの遊郭の娼妓と気持ちが通い合った体験から、遊郭は家庭的で温かい所であるというイメージを持っていたからではないだろうか。

同時に水上は、夕子とかつ枝という関係からも何かを暗示していると考える。「浄昌寺というのは伊作を葬った樽泊の菩提寺の名であった」[9]伊作の菩提寺が浄昌寺、そして夕子の名付け親が浄昌寺の和尚、かつ枝は、これは伊作が夕子を引き合わせてくれたに違いないと思った。また、夕霧楼の夕と同じ字の夕子、これも何かの因縁かと思い夕子を自分のところで引き取り、

夕子に親しみの念を持ち続ける。夕子を竹末甚造に水揚げさせたのは、遊郭主としてのかつ枝のしたたかな計算もみえるが、かつ枝は夕子を始め遊郭の娼妓達にとっては母親同然の存在であり、それだけの愛情を娼妓達に注いでいる。

以上のように、水上が描いた夕子達娼妓は不幸な身ではあるが幸せに過ごしている。不幸の幸ということを水上は示したかったのではないだろうか。本作品の娼妓達は「明るく」描かれており、そこからは女性の「幸福感」が認められ、恨み、憎しみ、金銭欲、確執などは見えない。夕子は慈悲と寛容という精神で人間の悪、醜、罪、欲を浄化しているのではないだろうか。『飢餓海峡』（1962 年）の八重と、『越前竹人形』（1963 年）の玉枝も娼妓と同じように水上は描こうとしたのではないだろうか。ここには、水上文学の重要な特徴であり根本的な思想があると考える。

> 遊女によって、人間はいかに貧困であり、ボロをまとっていても、美しい心のもち主であれば、人にダイヤモンドのようなありがたい教えをのこしうるものだということを、今ここで考えたりするのだが、これとて正眼国師[10]に叱られるのである。（中略－筆者）この世に醜も美も、浄も不浄もありはしない。本来が空相なのである。それを、何かと色眼、色心で、よけいなことを実体と見間違えて、私たちは愛憎分別の世界を生きる。[11]

娼妓となった夕子であるが、そこに見たのは苦難や悲哀ではなく、幸福感である。自分の心の中ですべての悲しみを希望に置き換えて解消している。だから、貧乏でも、富裕でも、苦難でも、幸福でも「本来無一物」[12]の精神で物事に執着しなければすべて解消できると考える水上の根本的な思想がそこにあるのではないだろうか。すなわち、「本来無一物」の精神を持てば、薄幸の中で生きる女性は《自己救済》の観念で救われることを水上は語っていると考える。

また、夕子は夕霧楼に着いたその晩に早速、鳳閣寺にいる正順に「両腕でかくすようにハガキを書いて」[13]自分の居場所を知らせた。娼妓に身を置いても、京都に行って正順に逢いたいという一心が、夕子を娼妓にさせる覚悟をさせたのだとも言える。水上はこのような一途な女心の夕子を描くことによって、幼馴染みの淡い恋心が深い愛情に昇華して、やがては仏の住む「あの世」まで続くことを書きたかったのかもしれない。

2　男性の心の救済

1節では、水上は苦難や悲惨などの運命を気にすることなく、慈悲、寛容、犠牲、奉献などの精神を持ち合わせていれば、苦難などから《自己救済》できるとの考えを持っていることを明らかにした。それならば、女性は他人である男性をいかに救済できるかという疑問が次に生じる。そこで水上文学における性および女性の役割を考察してみよう。

水上は、「貧困の谷間で生まれ出た子たちも性に目覚める頃に都に出て最初に肌をすり合わせた女性は 60 パーセント、あるいは、70 パーセント遊女でした」[14]と述べているが、本作品では京都に出てきた正順と娼妓夕子の間には性的関係は見られない。通常、性交渉は男性にとって欲望の充足を目指すが、水上はそれと違う意義づけをしたのはなぜだろうか。

尾形ゆき江は「暗い性がもたらす悲劇を描いた作品」[15]と解している。尾形は水上の『五番町夕霧楼』などの作品には性の明るさが少ないと評した。正順と夕子はプラトニックな愛であるが、自殺したことから荒涼と孤独しか見られないと尾形は解したのではないだろうか。しかし、性交渉がないということは悲劇なのだろうか。遊郭夕霧楼の娼妓達は春を売ることを商売として割り切って働いているとし、夕子の水揚げ相手である竹末甚造との直接的な性描写もなく、また夕子の想い人である正順とは性的関係のない設定をして「明るい性」の舞台として描いている。

夕子は正順のすべての悲哀を一身に受け入れて床の中でただ抱きしめている。これについて千葉俊二は、「愛とは先ず性の問題である以前に骨肉の情として意識せられたのであろう。夕子はそうした作者の心情から形象化された一人の永遠女性であったといえよう」[16]と述べている。水上の性の観念とは何なのか。性描写がないのは水上の女性観から来ていることなのか。水上の女性観の何が男性救済に結びついているのか。ここでは、以上の疑問について考察する。

野口武彦と水上の対談に、「母性」と「娼婦性」は対立するものではなく補う部分があるとする以下のコメントがある。「僕（水上－筆者）も対立しているというふうには考えておりません」[17]というように、水上は母性と娼婦性が繋がっていることを肯定している。男性は女性と性交するときは母親のぬくもりを思い出すのかもしれない。言い換えれば、娼妓は母親として男性の心を温かく包むのである。また、正順にとって夕子は心の救済者であろう。そこには崇高さや尊敬が満ちている。したがって、水上は男性が女性と性交することは描写したくない。夕子と正順が性交したならば、水上の母性に対する気持ちが傷つけられるからである。相手の崇高さ、尊敬などが破壊されるかもしれないのである。これが、本作品に性的描写がない理由の一つだと考える。

それから、遊女が菩薩として描かれている点も注目される。水上は禅寺に入ったが、そこから脱走した。その後五番町の遊郭に行き、そこの醜い娼妓と性行為をした。水上の友人はその娼妓に水上が淋病にかかったと冗談で話した。そうしたらその娼妓はわざわざ薬を持って水上を見舞いに来た。これについて水上は、「女性は弥勒菩薩である」[18]と書いている。

また、夕子の名前は、浄昌寺の和尚が付けたものである。そのことは夕子が《仏の代位》であることを暗示しているのではないか。また、夕子の「右肩のな、ちょっと下から脇の毛ェのとこへかけて、百粒ぐらいもあるやろか。えらいゴマがふいとる」[19]という身体の描写は、一般的な女性ではなく、珍しい身体である。水上は夕子が特別な身体、あるいは人間ではない身体を描いたのではないか。夕子は「仏の女」であることを暗示させていると考える。水上は、

夕子が「弥勒菩薩」であり神聖であることを書こうとしたのではないだろうか。

それならば、「弥勒菩薩」としての夕子は正順と性的関係を持たないのに、どうして正順と付き合ったのだろうか。夕子は正順の苦痛をよく知り同情しているから、正順のためにも金銭を稼いでいる。その正順は登楼しても、いつもただ夕子の側で静かに寝て行くだけである。そのときの夕子は母性と娼婦性そして仏性が重なっており、慈悲と愛情で正順の心を救済しているといえば合点がいく。自分が生きて行く上で、吃音であるために、正常で人間的なものを求めたが拒否された正順にとって、自身の劣等感、悲惨な寺院での生活、抑圧された性欲などのため、欲、悪、不満などが蓄積して一種の罪になっていると思われる。だから、正順は夕子と会うことで性的充足を求めているわけではなく、正順の抑圧された心を夕子に受容されることで罪が浄化され、女性を愛しく感じることができたのではないだろうか。あえて性交渉のない描写をしているのは、女性の救済する役割を強調していることを暗示していると考えれば不思議ではない。このように夕子は正順の心を救済しているのである。すなわち、男性は遊郭に行って女性を抱くことではなく、抱かれることを望んでいるのである。男女両性間において、最後まで性的関係がないということは異常なことであろうか。

なお、夕子は竹末甚造や「一げんの客」とは嫌がることなく性的関係を持っている。これは娼妓の宿命として覚悟のうえで金を稼ぐ目的で商売上の性行為である。この場合は愛などのない欲情の世界である。水上はこのように遊郭の性的関係のある「常識」と性的関係のない「非常識」の両方を描いている。これはどうしてなのか。それは水上の体験にもとづくものではないかと推察する。遊郭は性的関係を持つ所であるが、男性がそこに通うのは、ただ単に女性と性行為をしに行くだけではなく、そこに心の安らぎの場を求めて行く者もいるということである。

本作品では、男性を見棄てておけない母性愛のような夕子の幸福感がにじみ出ている。その根底にあるのは、夕子の慈悲の心で人を救済しようとする仏の心があるのではないだろうか。慈悲と寛容の母性愛によって、女性の自己苦難の救済と男性の心の救済の両方がかなう。これは、水上が「十八歳で童貞を失ったんですけど、（中略―筆者）べつの喜びと感動」[20]があったという気持ちの裏返しであると思われる。つまり、母性を犯した罪悪感はあるが、心を救済された喜びと感動は別であるということである。

瑣事に悩み、色に惑うのは人間の本質である。悩み惑い続けることから、悪が生起してくるかもしれない。自らの煩悩の熱い炎に焼かれ身悶えしながら、なお人間の真実に迫ろうと水上は、一筋の光明を求め「般若心経」を一休和尚に問い、正眼国師に学ぶ。その苦悩の果ての悟りとは、のたうち回り自らを「愚かだ」と言い、這いずり回ってその生を生き抜き、水上は真実を探し求めている。社会的に虐げられている娼妓は、最高の人間性を悟っているのではないか。だからこそ水上は、無名の庶民の底知れぬ遺恨を代弁しながら、女性を「仏性」にまで昇華することができると考えるものである。

3　水上文学の原点

1 節と 2 節において、娼妓の《救済》について考察したが、それは娼妓である夕子が深い人間性や仏性をもって、自己と男性を救済したということである。水上は薄幸の女性を描いたのでなく、幸福な女性の姿を示しているのである。このような水上の考え方はどこからきているのだろうか。その疑問を解明したいと思う。水上は慧能に注目しているので、そこに手掛りがあると考える。

水上は禅寺の小僧だったので、「『語録』も『経』も、身をしつけられる思想もみな中国の先覚達の発想だった」[21]というように、年少の頃から中国の禅に親しんでいる。だから、中国禅宗第六祖慧能[22]の「壇経」などを、「わきにおいて、勝手に空想して」[23]、中国の禅について良く学んでいる。「慧能は労働禅を追究している。その思想も頓悟禅だから、弁証法的に容認されたのかもしれない。貧家で母思いだったということも正面教材の人だろう」[24]というような言葉からすると、慧能の思想が水上に影響を与えていると考えてよいだろう。

慧能は、朝廷の寵愛を受けていた。女皇武則天は詔書で崇敬の念を表している。中国古代の詩人王維の『六祖慧能禅師碑銘』、柳宗元の『曹溪第六祖賜大鑑禅師』、劉禹錫の『曹溪六祖大鑑禅師第二碑并序』などに慧能を褒め称えた詩がある。その慧能はある日「金剛経」の読誦を聞いて出家を思い立ち、東山の五祖弘忍の下に参じたが、文字が読めなかったために行者として寺の米つきに従事した。だが、「菩提本無樹、明鏡亦非台、本来無一物、何処惹尘埃」[25]と「偈」を詠んだ。つまり財産一切なし無一物の世界、すなわち、存在するすべてのものは空であるから、執着、煩悩もなく生死さえもないという意味で、この世の一切のものから自在になる心境をいう。また、慧能は多くの学僧の米を搗く修行のため大石を腰にくくりつけて重しにしたので、腰と足に腫れ物が出た。それを見た弘忍大師は「汝、供養をなすに腰と足を損う。痛めしところ如何」、慧能答えて曰く、「身有ることを見ず、たれかこれを痛といわん。（中略－筆者）身を思わずにおれば、痛くはないものです」[26]。この教えは、水上の小僧時代の心の糧となっただろう。水上自身も、「便所壷は一月に二回ほど汲まねばならなかった」[27]苦労をし、また寺を脱走した後は仕事を転々としたので、慧能の「本来無一物」という教えは身に沁みるのであろう。水上はこの「本来無一物」の精神で、苦難や怨念など何にも拘泥することなく幸福になれる《救済》の観念を本作品で描いたものと考える。

次に、水上の『「般若心経」を読む』に、「死して百日紅や椿になる」とあり、そして、本作品の重要な場面に百日紅が描かれているのでこれに注目してみる。水上は百日紅に何か特別な意味を込めているのか。「あのお寺はんは、うちらァのいた三つ股のお寺はんどしたや。きれいどっしゃろ。百日紅がさいとります」[28]、「桃いろの百日紅の花のかたまりをのぞかせてかすんでみえる。伊作の葬式をすませた寺であった」[29]、「ながいこと、浄昌寺の墓場に百日紅が咲いとります」[30]など、墓場における百日紅の描写がある。そして、正順が亡くなり埋葬された墓

地で、夕子は正順の後を追うようにして命を落とし、その墓地で百日紅が咲き乱れ散っている描写がある。人間の最終的な落ち着き先は墓場であり、その中で夕子と正順は死して、人間の欲、罪、不幸などを浄化されて新たに生まれ変わったと言えるのではないだろうか。

> 片桐夕子は彼岸花を紅く染め抜いた浴衣を着て、黄色い三尺をしめていた。病院を出たままの装である。持ち物は何一つ無かった。百日紅の根もとにうつ伏せになって倒れていたが、睡眠薬をのんだものらしく、傍らに一枚の白い薬包紙が落ちていた。（中略－筆者）すでに、百日紅の下には筵が敷かれていて、夕子の死骸は仰向に寝かされ、花柄の浴衣の裾前が、きれいにかきあわされてあった。[31)]

このように、百日紅の花に優しく包まれるように死した夕子は、《自己救済と救済》を会得したのに、水上はなぜ夕子に死の結末を与えたのか。水上にとって死は「空」という意味があるのか。水上は、「般若心経」の世界は「空」であることを肯定している[32)]。そのことは本作品のいたる所から感じることができる。また、般若心経でいうところの「色」とは、形ある人間の性欲、食欲、財産欲、名誉欲などであり、また、人間の幻想でもあるが、最後は無になってしまう「空」の世界で、つまり「色即是空」であり、欲などはまさしく空になってしまう。

> 人生を富裕にすごす人も、貧乏ですごす人も死ぬば棺は二尺五寸である。（中略－筆者）死人は棺に入ると、すぐにさんまい谷へはこばれて穴の中に落とされる。（中略－筆者）死人から死人へ、根の先をのばして網になっとる。これは、ぐるりに生えとる椿と百日紅や。樹の花は、死人の肉が根から栄養になって、咲いとる。[33)]

この言葉は、大工で棺桶も作っていた水上の父の言葉である。つまり、貧富にかかわらず「死ねば棺は二尺五寸」に納められ皆平等になるということであり、そして「死人の肉が根から栄養」とは、死人の心や精神のことを指し、それが綺麗な百日紅を咲かせるのである。そうすると、苦難といい、幸福といい、富裕といい、貧困といい、何にも拘泥しなければ良いことを水上は示したのではないか。水上は人が死んでしまえば「いろいろの思わくも離れて生滅もない。このように、自分の周囲をいちいち明らかに照らしてみることを名づけて一切の苦厄を度すというのである。自ら悩む分別の苦を幻夢の如く、空華の如く、一切分別の影とわかれば、ありのままで空なるがゆえにである」[34)]というように、これは空の世界である。

性についても同じである。遊郭において、女性は男性の快楽の対象であり、性欲を達成する場であり、その性欲は煩悩である。欲は自己を持っており、結局自己というか自我を持つことは苦に通じる。すなわち、苦の根拠に我・自我があるわけで、欲から苦が生じそれが色である。人間は欲を捨て自己に打ち勝つことができれば、また性欲からも抜け出すことができるのでは

ないだろうか。

なお、百日紅は、水上にとって特別な花樹である。すなわち、水上が京都の寺に小僧として入ったが、「寺の生活はきびしく、若狭の母のことばかり頭にうかべて泣きくらしたが、（中略－筆者）表庭の百日紅が淡桃の花を咲かせたのをみて、私は、また母や菩提寺のおばさまのことを思って泣いたものだ」[35]と書き記しているように、百日紅には水上の幼い日のせつない思い出がつまっている。

「山かげになってますけど、入江へ舟を出すと、よう見えるンどすねや。百日紅ちゅう木はつるつるにすべる背のひくい木ィどした。正順さんも、あたしも、お墓の石塔に足のせて、よう木ィへのぼって、和尚さんに叱られましたンおぼえてます。」[36]と、百日紅は夕子と正順とを重要な場面で結びつけている。そして、「死人から死人へ、根の先をのばして網になっとる。」[37]というように、夕子の慈悲の美しい心が百日紅によって暗示されていると思う。また、百日紅は、夕子が菩薩になって正順の欲や悪などを浄化した後の象徴的なものとして描かれているのではないだろうか。

水上は慧能の「本来無一物」の思想、すなわち、「本来、清浄とか塵埃とか二元的に分けて身や心を考えるようなことは真っ向から否定した。浄も穢もともに否定した。したがって、迷も悟もないのである。穢の中に浄があり、浄の中に穢があり、悟りの中に迷いがあり、迷いの中に悟りがあるというのである」[38]と、人間が何も拘泥しない方がいいと言うことを強調している。このように水上は、慧能の思想を自分の作品に反映させていると思われる。それは、物質が存在しているかどうかは人間の心の問題であるというのと同じである。

水上は、「共産主義の中国の今日でも、慧能が労働につとめて、真理に立ち至ったことは評価されているようで、案内者は弁証法的に慧能禅を説いてくれたことが記憶に残っている」[39]と述べたように、物質は形で存在するが、弁証的に慧能禅の精髄が納得できると思う。これは毛澤東が言った慧能禅の「彼（慧能—筆者）は主観能動性を強調していた」[40]からきているのではないだろうか。つまり、人間の目で見ると、存在しているものは形でも、性質でも変わることはないが、心に通じて存在しているものは増え、あるいは広くなることはある。しかし、鏡に映ったのは少しも広くなったりはしない。水上は「六祖の鏡のたとえのように、本来にそういう瞋恚、貪欲をもつ人間なので、そのままそれでよいのである。元来、何もないのである」[41]と言った。もし人間は鏡のように、「照らすままに照らす、自在なるものである」[42]ということができれば、菩薩になることができると思われる。夕子は水上が表現した理想的な人間であり、それが菩薩ではないのかと考える。

そうすると、水上の作品は、人間の苦悩や苦難を明らかにしたのではなく、人間の心の慈悲と寛容とを表現していると考えられる。人間の苦悩や苦難の背後に慈悲と寛容の心が見えると説くところは、水上文学に禅の思想の原点であるのではないだろうか。

貧しい生活を送っている人々が生きる上での美しさ、つまり慈悲と寛容の心を持っていれば、

どんな苦難があろうとも幸せな気持ちで過ごすことができる。世俗の功名利禄を忘れて精神を豊かにして過ごすことは、人間として正直な生き方であることを、水上は明確に説いている。「六祖慧能大師は文盲の身の樵夫でありながら、一日、金剛経を説く人が町の辻にいたことが縁で、その日から禅に入られたときいたからである」[43]と水上が述べるように、慧能は労働者であり、また、文盲であるが、禅を悟ることができた。つまり、貧乏人でも禅を悟ることもできる。したがって水上は、夕子も禅が悟れることを描いたのではないだろうか。ここから、水上の「徹底的な貧困者を舞台とする決心」[44]を読み取ることができる。だから、水上は、貧困者の生活を現しているだけでなく、貧困者のために最大限の改善ができるように全力を尽くしていると考えられる。「水上語録は、人間における仏の自覚を、自己救済の道程とかんがえているのではないだろうか」[45]ということは、水上文学は人々の心に深く影響を与えるのではないかと考える。

4『雁の寺』

3 節では、水上文学の原点が慧能の思想にあるとの考察を行った。ここでは、それを証明するために『雁の寺』を検討したい。

木村光一は、「里子の不安とおびえを鋭く感知して、まるでそれによって憎悪の世界の体験を楽しむようにである」[46]と述べているように、「不安」や「怯え」などは感じるが、「楽しむように」生きている里子は、『五番町夕霧楼』の夕子に似ているのではないか。『雁の寺』においても慧能の「本来無一物」の思想がどのように暗示されているか考察したい。

水上は『雁の寺』で、林養賢をモデルとした慈念という人物を設定している。もう一人の主人公である桐原里子は、「孤峯庵の庫裡の内妻に入った理由を分析してみると、まず経済的な事情が作用している」[47]というように、生活のために身体を売ったのは夕子と同じであると思う。表面的に見ると『雁の寺』では、陰気な僧侶の生活などが描かれており、水上が僧門を批判している動機が分かる。しかし、分からないのは、里子が和尚の慈海と性行為をしたとき、「慈念のように思われた。しかし、それは何でもない影のようでもあった」[48]とはどういうことか。また、里子が慈念に対して、「なんでもあげる。うちのものなんでもあげる」[49]という意味は何か。また、私は、慈念の「捨吉」という名前に注目している。「捨吉」という名前は日本古来の含意があるが、「一切無」になることによって、新たな幸せをつかむことができるという意味でもある。ここに、禅の思想の深い意味があると考える。このように、『雁の寺』においても、慧能の禅の思想の影響があらわれているように思われる。

『雁の寺』、『五番町夕霧楼』および『金閣炎上』は、根底において慧能の禅の思想で繋がっているように思われる。『雁の寺』における里子の運命は、『五番町夕霧楼』の夕子より幸福であるか否か。僧房の中で生活している里子は、慈海の性欲の道具のようなものである。その意

味で、狭い僧房の里子の世界は、遊郭での娼妓達の世界と異ならないだろう。だから、里子は自分の境遇は気にならない。「慈念の日課は、朝五時起床。洗顔。勤行。飯炊き。それがすむと、庫裡の台所に莫蓙を敷いて朝食。八時半に寺を出て、山道から鞍馬口に出る。千本通り、北大路の大徳寺の西隣りにある紫野中学に通う」[50]と苦しい。里子は、そのような慈念に同情して母性愛が芽生えたのではないだろうか。なお、里子が慈海と性行為をする時は、慈念を想像している。慈海に抱かれながら慈念を思い、哀れだと感じている。だから、里子の母性愛で「胸もとにつきあげてくるような愛しさがあった。それをこらえきれないままに里子は不意に慈念を羽交い絞めに抱きしめていた」[51]という衝動が起きたのである。

そうすると、「なんでもあげる。うちのものなんでもあげる」[52]というのは、里子が慈念の救済ため、自分の全部を捧げたいという気持ちがあったのではないか。水上はここでも性のことだけではなく、慧能の禅の思想を取り入れて里子も慈悲のような仏性を持っているように描いたのではないかと考える。

また、水上が 1971 年に戯曲化した『雁の寺』は、小説『雁の寺』の主題を絞り込んで書いたように考える。水上は「隠寮の部屋の床に掛軸、『本来無一物』」[53]とわざわざ書いたのは、慧能の思想を目指したからではないだろうか。

里子は慈海の内妻であるが、運命的には悲惨であり、その面では「孤峯庵では孤独であった」[54]という慈念と同じである。しかし、里子は《自己救済》ができていたのである。

> 苦しゅうても、楽しゅうがまんできる場所に生きてることがしあわせとちがうやろか。（中略-筆者）人間にはな……いろいろの幸福があるのんとちがうやろか。……小っちゃい時から、お母ちゃんに、甲斐性のないお父ちゃんやと、お父ちゃんのこと、阿呆みたいに教えられてきたけど……四十年も、ここで、膏薬つくって売ってはるお父ちゃん……いくら貧乏やいうても……しあわせかもわからへんやろ。外をみたらきりがないわ。よそみたら、それ自分らだけ不幸に思えるかもしれんけど、自分の足もとが、いつもたのしゅうみえてなんだら、いつも不幸やんか。……貧乏でよいやんか。お妾でもよいやんか。（中略-筆者）（幸せ-筆者）その人の心の中にしかあらへん、ぬくみやんか。[55]

以上の文は、慧能の「本来無一物」の精髄を明らかにしている、中国禅宗の精神である。すなわち、「本来空」、万象は実有ではなくて本来仮の存在であるから、一物として執着すべきものはなく、一切のものから自由自在であるとする「本来無一物」の思想があると考えられる。里子も夕子もこのような考えを持って自己と他人を救済していることを、水上は描いたのではないか。

また、水上は慈念、正順、養賢に対してどんな考えを持っているか。慈念の「捨吉」という俗名に深い意味があるのか。仏教の中で「七種捨」があり、「三捨一切貪瞋等過名之為捨。六自

捨己楽、施与他人、説之為捨」[56]というように、「捨」という言葉は何にも執着しなく施す意味があるのではないだろうか。また、中国禅の、「捨得」[57]というのは捨てると吉を貰えると考えられる。実際に水上は、慈念も、正順も、林養賢も社会、運命に対して不満、怨念を捨てることが出来なかったので、真の幸福を得ることができなかったと考えているのであろう。この問題は、次の論文において検討してみよう。

おわりに

本論文では、『五番町夕霧楼』の夕子を中心に水上勉文学の原点を検討した。私は水上文学における薄幸の女性に注目したが、娼妓である夕子に悲哀はなく、慈悲や寛容の心を持った弥勒菩薩のような女性として描かれており、彼女らの苦難は救済によって解決されていることを明らかにした。言い換えれば、薄幸の女性に注目している水上は、女性の精神の深い人間性を掘り起こしたといえる。夕子は娼妓であるが、その苦難や残酷な生活は描かれなくとも、想像できると思われる。水上は、「徹底的な貧困者を舞台とする決心」を持って女性の慈悲と犠牲の偉さを明らかにしたのである。また、水上は、貧しく薄幸の女性は弥勒菩薩であり仏性を持っていると考えた。弥勒菩薩の微笑みは寛容の心であり、その姿が夕子である。

次に、『五番町夕霧楼』を中心に、水上の性の観念から水上の創作動機を検討した。水上は「生来の女好き」[58]であると自ら言うが、その女性観を分析しながら、女性が仏性を持っている人間だという拠所を確認した。また、夕子は愛情と慈悲で男性の心を救済していることを明らかにした。女性には救済があるという水上の考えの原点は、中国禅宗第六祖慧能の「本来無一物」の思想からきていると私は判断した。

水上には、小僧の経験と貧しい生活の体験がある。しかし、脱走して還俗した水上は、仏を捨てたはずだが、文学に仏のこと、特に中国の禅について書いている。『禅とは何か』(1988 年)、『清富記』(1993 年)、『慧能』(1995 年)、そして水上の最後の長編小説『虚竹の笛—尺八私考』(1999 年) も水上の晩年の中国禅に関する作品である。このように水上は、生涯を尽くして禅の精神を学んだので、晩年には悟ったと考える。橋本峰雄は、「水上氏の生い立ちと人生、その文学のすべては仏教的である」[59]と述べているように、水上は作品において、意識的にまた無意識的に禅の精神を取り入れた。したがって、禅の精神を持っている水上は、貧しい人に注目しているだけではなく、貧困者の生活を改善したいということが主眼だと考える。『雁の寺』では、水上は里子と夕子も「弥勒菩薩」であるという考えを表し、慧能の禅の精神を暗示したと私は結論した。水上は実際には富裕や貧困を改善できないが、文学で人間の心を育てて救済できると考えたのだろう。これは水上文学の重要な価値観である。水上は中国の慧能禅の思想に影響されているので、水上の他の作品も考察してみたい。今後は、『五番町夕霧楼』と同じ題材の『金閣炎上』における男性の心理を中心に、水上文学の中国の禅について検討する。また、

それ以外の作品においても中国の禅の思想の影響が現れているか検討してみたい。

＜注＞

1) 水上勉『水上勉全集・2』中央公論社、1977 年、558 頁。
2) 水上勉『水上勉による水上勉』青銅社、1982 年、143 頁。
3) 水上勉『新編水上勉全集・2』中央公論社、1996 年、422 頁。
4) 平野謙「にじむ人間生存の恨みと悲しみ」『新日本文学全集・34』文芸春秋社、1964 年、418 頁。
5) 水上勉「五番町夕霧楼」『水上勉全集・2』中央公論出版社、1977 年、123 頁。
6) 前掲書 18 頁。
7) 前掲書『五番町夕霧楼』67 頁。
8) 前掲書、195 頁。
9) 前掲書、13 頁。
10) 盤珪永琢（1622-1693）、諡号は仏智弘済禅師・大宝正眼国師。江戸時代前期の臨済宗の僧。「不生禅」を提唱する。彼の説く「不生の仏心」は遠く中国唐代の純禅に直結するもの。『岩波　仏教辞典』（第二版）中村元等　岩波書店、2002 年、835 頁。
11) 水上勉「『般若心経』を読む」『新編水上勉全集・2』中央公論社、1996 年、415 頁。
12) 自己、万法の本来の姿をいう、あらゆる一切の存在の真実のあり方は、本来縁起、空の現成であって、自我の執着すべき固定の実体はないこと。『六祖壇経』行由にある語。「本来無一物なれば、諸事において、実有我物の思ひをすべからず、一切を捨離すべし」[播州法語集]　『岩波　仏教辞典』（第二版）中村元等　岩波書店、2002 年、949 頁。
13) 前掲書『五番町夕霧楼』34 頁。
14) 水上勉「文学における冥界と女性」対談 別冊新評《作家の世界》シリーズNo. 18『水上勉の世界』、新評社、1978 年、73 頁。
15) 尾形ゆき江「水上勉とその文学にみられる女性像」『衣笠・７』立命館文藝会、1990 年、44 頁。
16) 千葉俊二「『五番町夕霧楼』の夕子」国文学「名作の中のおんな 101 人」25 巻（4）臨時増刊　学燈社 1998 年、185 頁。
17) 水上勉「文学における冥界と女性」対談　別冊新評《作家の世界》シリーズNo. 18『水上勉の世界』、1978 年、74 頁。
18) 前掲書「『般若心経』を読む」、411 頁。
19) 前掲書『五番町夕霧楼』53 頁。
20) 前掲書「文学における冥界と女性」、74 頁。
21) 水上勉「学ぶことの多い最も近い外国―中国と私」『公明』公明党機関紙局、1982 年 248 巻、49 頁。
22) 慧能（638-713）唐代の禅宗の僧で、＜六祖大師＞、＜曹渓大師＞などとも呼ばれる。(『岩波　仏教辞典』（第二版）中村元等　岩波書店　2002 年　91 頁)。
23) 水上勉「慧能」『清富記』新潮社、1995 年、238 頁。
24) 水上勉『新編水上勉・5』あとがき　中央公論社、1996 年、437 頁。
25) この大意は「心身のどこをさがして、菩提とか明鏡とかいったものがあり得よう。本来何もないのである。塵のつきようもあるまい。」（水上勉『禅とは何か』『新編水上勉全集・5』1995 年、144 頁。
26) 前掲書「慧能」242 頁。
27) 前掲書『水上勉による水上勉』38 頁。
28) 前掲書『五番町夕霧楼』20 頁。
29) 前掲書『五番町夕霧楼』20 頁。
30) 前掲書『五番町夕霧楼』20 頁。
31) 前掲書 197 頁。
32) 「『般若心経』を読む」392 頁。
33) 前掲書「『般若心経』を読む」423 頁。
34) 前掲書 397 頁。
35) 前掲書『水上勉による水上勉』39 頁。
36) 水上勉「五番町夕霧楼」『水上勉全集・２』中央公論社、1977 年、160 頁。
37) 「『般若心経』を読む」392 頁。
38) 前掲書 144 頁。
39) 「禅とは何か」145 頁。

40) 張鉄軍「1958年8月21日に、毛澤東は中共中央政治局北戴河拡大会議に参加者に対して紹介した：唐朝佛教《六祖檀経》記裁、慧能和尚は河北人、不識字、博学、広東に伝経する、一切皆空を主張している。これは徹底的唯心論である。しかし、彼は主観能動性を強調していた。」（1958年8月21日，毛泽东在中共中央政治局北戴河扩大会议上讲话时对与会者介绍说：唐朝佛教《六组坛经》记载，慧能和尚，河北人，不识字，很有学问。在广东传经，主张一切皆空。这是彻底的唯心论，但他突出了主观能动性。）「毛澤東談禅宗六祖慧能」「党的文献」2007年6月、79頁。
41) 前掲書「禅とは何か」390頁。
42) 前掲書「禅とは何か」387頁
43) 水上勉『新編水上勉全集・2』「あとがき」477頁。
44) 水上勉『金閣と水俣』築摩書房、1974年、218 頁。
45) 小松伸六「水上勉・人と作品」『昭和文学全集・25』小学館1029頁。
46) 木村光一「自然の荒寥たる彼岸」『水上勉全集月報・7』、1977年、4頁。
47) 水上勉「雁の寺」『水上勉全集・1』中央公論社、1977年、15頁。
48) 前掲書15頁。
49) 前掲書56頁。
50) 前掲書21頁。
51) 前掲書56頁。
52) 前掲書56頁。
53) 水上勉「雁の寺」（戯曲）『水上勉全集・26』、1977年、8頁。
54) 前掲書「雁の寺」20頁。
55) 前掲書「雁の寺」（戯曲）32頁。
56) 織田得能『佛教大事典』名著普及会　1916年、764頁。
57) 袁了凡『佛経・了凡四訓』「実無所捨、亦無所得、是謂捨得」、中華書局、2008年。
58) 水上勉「瀋陽の月」『新編水上勉全集・14』、1995年、26頁。
59) 祖田浩一「寺へ入った道」『新編水上勉全集・6』付録、1995年、461頁。

主指導教員（錦仁教授）、副指導教員（佐々木充教授・先田進教授）